

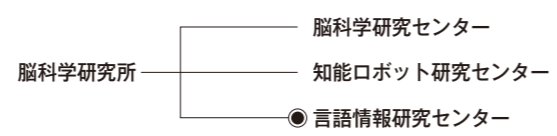


No. 7

言語情報研究センター
リベラルアーツ学部教授
佐藤久美子



赤ちゃんは言葉を獲得する力を備えて生まれてきますが、親との会話の中からさらに習得する手がかりを得ます。より多くの語彙を持った表現力豊かな子どもを育てるには、親はどんな接し方を心がければいいのでしょうか？



表現力豊かな子に育てるには？

お母さんの言葉を真似する赤ちゃん

まずは本題に入る前に、赤ちゃんがどんなふう言葉を獲得していくか、について説明しておきましょう。生まれたばかりの赤ちゃんは、英語や日本語など、どんな言語も体得できる状態にあります。「日本人は英語のLとRの発音の違いを聞き取るのが苦手」とよく言われますが、生後半年未満では、母語が英語、日本語いずれの場合もLとRの聞き取り能力の差はなく、あらゆる音を聞き分ける能力を持っています。

その後、赤ちゃんは両親や周りの人々の会話を聴く中で、日本語の意味の違いに必要な「音」に集中するようになり、生後一年ほどでそれ以外の音はあまり聴きとれなくなりま

す。日本語獲得に必要な「音」を聞き取るための能力を身に付けた赤ちゃんは「ママ」「パパ」といった一語からなる単語を発するようになります。

お互いに真似し合うことの重要性

赤ちゃんが言葉を覚えていくうえで、こうした言葉の模倣は非常に重要なものと考えられています。幼い頃に母親の言葉を上手に真似する子どもほど、語彙サイズが大きい(単語を多く知っている)ということが、すでにイギリスの研究で明らかになっています。

私たちの研究センターでも、三六歳児を対象に、聞いたことのない単語をテープで聴かせて、反復能力を測るとともに、絵を見せながら語彙の取得レベルを探る、という実験を行ったところ、日本語においても単語の反復能力と語彙サイズの間には、相関関係があることが確認できました。

そこで今度は二歳児を対象に同様の実験を行うことになったのですが、このときはもう一つ新たな発見がありました。実験の後、母親たちに普段通りに子どもと遊んでいる様子を見せてもらったところ、母子のコミュニケーションのとり方が、子どもの言語発達に大きな影響を与えていることがわかりました。

母子のコミュニケーションは「あ



母子間における言葉の模倣のコミュニケーションは、外国語習得にも有効とされ、今後は外国語学習の分野での活用も期待されている

の読み聞かせなどの中で徐々に育まれていきます。日本語がしっかりと聞き取れ、意味が理解でき、しゃべれるようになるのは、五〜六歳ぐらいと考えるといいでしょう。

この過程の中で興味深いのは二〜三歳の頃に見られる母親の言葉を真似する現象です。二〜三歳くらいになると、言葉の反復がどんどん上手になっていきます。「電車に乗ろうか」と母親が言うと「デンシャ、デンシャ」といった言葉の模倣が盛んに返ってくるようになります。

無口な関係より、お互いに言葉

を交わさない無口な関係と「母子がお互いに言葉を交わしている関係」と「母親が一方的に赤ちゃんと話しかけている関係」の三タイプに大きく分けられます。

無口な関係より、お互いに言葉を交わしている関係にある子どものほうが、単語の模倣能力が高いという結果は予想していたのですが、意外なことに、母親がおしゃべりで一方的に話しかけている関係にある子どもの反復能力も、無口な親子と同様に低いという結果が出たんです。

つまり多くの言葉を子どもに聞かせるだけでは、言語能力の発達に繋

がらないということになるわけ

です。いったいどんなコミュニケーションが良いのかというと、たとえば母親が「ボールあったわね」と言うと、子どもが「ボールあった」と模倣し、その逆に子どもが「ナイナイ」というと母親は「ナイナイしようか」と返す。つまり母子がお互いに言葉を真似し合う関係が、子どもの言語発達を促していると言えるでしょう。

またこうした相互の会話は、言語能力を育むだけでなく「ママは僕の言うことを理解してくれているんだ」という子どもの安心感や喜びに

も繋がります。喜びを感じた子どもはさらに母親の言葉を模倣することをきっかけとして、自発的により複雑な文を発する能力が高まっています。

ちなみに反復能力には脳の短期記憶の一つである「ワーキングメモリ」が関係していますが、以上のような研究成果から、このワーキングメモリが生後二六〜二七カ月頃に発達してくることが分かります。この時期により多くの会話の機会を作っておけることが大切なのはもちろん、ワーキングメモリを鍛えることが外国語習得にも有効だと考えています。



取材・文/中村宏寛 イラスト/小松希生